

現代のドイツを通じた「学び」

浜崎 桂子

1. はじめに 一言語教育の一つの柱としての“Landeskunde”

外国語を学ぶことの魅力の一つは、ある言語を通して「別の世界」を知ることができるという点にあるだろう。その意味で、言語教員は、当該の言語地域の社会や文化の知識を伝達する「代弁者」あるいは「広報担当者」でもある。そのことを意識すればこそ、言語科目を担当する教員は、その言語圏の地域や社会、文化の「魅力」を伝えようと、限られた授業時間内でそれぞれに工夫をこらしている。ドイツ語教育の分野では、このような「地域、文化、歴史についての知識」を指して、“Landeskunde”という概念を使う。この概念は、もともと、フランスや英米における（つまりドイツ本国以外の場での）「ドイツ学」が、従来の「ドイツ文学研究」偏重から、「地域研究」「社会研究」も重視するものへと方向転換した1960年代後半から用いられるようになったもので、地域研究の成果をふまえた「知識」という意味合いを持っている。日本でも、大学のドイツ語授業における“Landeskunde”のあり方や実践について、1970年代終わりから断続的にはあるが議論が行われてきた。そこでたびたび問題視されているのは、授業や教材で扱われるドイツ語圏についての情報が、往々にして、各教員や教材執筆者の偶然的体験に基づいた主観的な感想や限定的な知識の枠を出ず、“Landeskunde”としての客観性を備えていないという点である。も

ちろん、授業の中で、教員が個人的なドイツ体験を話すことで、学生がドイツ語圏をより身近に感じるということは重要であるし、私自身も、(多くは、授業中に学生の関心を引くために、いわば「ネタ」として)個人的な体験や、主観的な「ドイツ(人)論」を意図的に話すこともある。しかし、その言語圏の「代弁者」である教員が語る内容は、学生にはそのまま「事実」として受け止められ、ドイツについての固定したイメージを持たれてしまう危険性がある。本来ならば、個人的なエピソードや断片的な情報だけではなく、ドイツ語を学ぶ学生たちに(分野は限定するとしても)ある程度体系的な情報をきちんと伝え、言語の背景にある社会や文化についての理解を深めてもらいたい。さらには、ドイツの社会について知ることで、自分の周囲の社会について考える際の手掛かりになるような「別の視点」をみつけてもらいたい、と常々考えていた私にとって、言語副専攻の関連科目として開講されることになった「ドイツ語圏の社会」は、新しいチャンスでもあり、チャレンジとなった。



2. 授業の目的とテーマ

そのような私自身の関心もあり、この講義では、ドイツの社会についての解説を通して、学生が、自分の周囲の社会について、さらには世界的な状況について考えるきっかけを作ることを目指した。そもそも、ドイツという国は、敗戦国として第二次大戦後再出発し、経済復興と高度経済成長を経て経済大国となったこと、また現在、経済の低成長、少子高齢化といった共通する問題を抱えている点など、日本の社会と共通する点が多い。各回の授業では、現代の日本においても重要な問題に焦点をあて、以下のようなテーマを扱いながら、常に、ドイツの状況を知ることを通して、自分たちの生きる社会についてあらためて考えてみるよう、論を展開することに留意した。

各回の講義内容

- 1 導入：2009年9月ドイツ連邦議会選挙の争点と結果
- 2 冷戦時代のドイツ (1) —第二次大戦の終結からベルリンの壁の建設まで
- 3 冷戦時代のドイツ (2) —二つのドイツの歩みと対話の試み
- 4 ベルリンの壁開放とドイツ統一
- 5 統一後のドイツ —新首都ベルリンと連邦制
- 6 教育制度と大学
- 7 仕事と社会保障 (1) —職能制度と労働事情
- 8 仕事と社会保障 (2) —ワーク・ライフ・バランス
- 9 男女共同参画のこころみ (1)
- 10 男女共同参画のこころみ (2)
- 11 多文化社会ドイツ (1) —ドイツへの「移民」の歴史
- 12 多文化社会ドイツ (2) —「多文化社会」の現実と試み
- 13 EUの中のドイツ／まとめ

3. 授業内容と方法

ちょうど、2009年は、ベルリンの壁開放20年という記念の年であったこともあり、ドイツでは大きなイベントが祝われ、また日本のメディアでも、20年前の東欧の民主化運動、そしてその後今日までのヨーロッパやドイツの変化を回顧する番組や特集が多く放送された。今の学生たちにとっては生まれる前の歴史である「冷戦」時代とその終焉だが、ドイツの分断、ベルリンの壁の建設、壁開放からドイツ統一へとこの歴史は、その経緯のドラマチックさもあって、学生も関心をもって聞いてくれたようである。映像資料を使いながら、東西ブロックの政治対立の構造というマクロの視点と、冷戦の前線にあったベルリンの市民の生活というミクロな視点との両方を示すことで、当時のドイツの政治と社会について立体的に把握できるような解説を心がけた。「歴史年表で覚えた事柄の背後には、人間の生活があったんだと思った」というコメントを寄せてくれた学生は、この点についてこちらの意図を理解してくれたようである。

まだまだ未完成のプロジェクトである「ドイツ統一」はもちろん、講義で扱ったテーマは、どれも議論が進行中の問題ばかりである。学校制度や職業教育制度については、ドイツの伝統的な職能制度、資格制度が根本から問い直されているし、フンボルト流のドイツの大学もまた、EU内の高等教育を平準化するための「ボローニャ宣言」の枠組に基づき根本的な改革が進行中であり、またそれに対する大学関係者、特に学生自身による批判の声があがっている。日本と同じくドイツの政府が頭をかかえる少子高齢化問題や高い失業率、若年層の就職難については、さまざまな対策が果敢に導入されるものの大きな

成果は出ていないし、移民政策は、ここ10年でドラスティックに変わりながらも迷走中である。さらに、ちょうど、後期の講義開始の直前にドイツ連邦議会選挙があり、首相は続投となったものの連立政権党は交替となり、政策についての議論は講義中に再度変更する可能性もあった。

どのテーマもアクチュアルであるからこそ、身近な問題として考察するにはふさわしいトピックなのだが、複雑な事柄を、議論の経緯も含めて分かりやすく解説するのはたやすくはない。つまり、「ドイツの〇〇政策は、△△です」と、明確には述べる事ができない問題ばかりを扱うことになったため、聞いている学生にとっても、決して「理解しやすい」講義ではなかっただろうと思う。

それだけに、教科書的な事実を伝えるような、あるいは教員の見解を一方的に語るような形にならないように、提示の方法については配慮をした。どのトピックについても、議論を紹介する前に、政府機関の白書などからのデータ（たとえば移民の数など）を提示することで、他のヨーロッパ諸国や日本と比較しながらドイツの実情を示し、さらにはデータを読み取る（また、その恣意性に気づく）プロセスを見せ、問題のありか気づかせるよう試みた。そのうえで、ドイツの政策決定のプロセス、またその問題をめぐるメディアに見られる世論について、複数の立場の意見とその論拠、目的を紹介しながら、それぞれの立場の「関心のありか」に気づかせる解説を行った。このような方法をとることで、データ、メディアの解説、政府、市民の見解などを、どのように読み解き、解釈するかというメディア・リテラシーの方法を、デモンストレーションしたつもりである。

また、連邦議会議員や公的機関、大

学教員に、女性を多く登用するための「ポジティブ・アクション」の是非や、公の場におけるイスラム女性の「スカーフ」をめぐるドイツや他のヨーロッパの国々での議論など、いわば未解決の問題、答のないテーマについても扱った。このような、マイノリティとマジョリティ、複数の当事者の「人権」が複雑に絡み合うセンシティブなテーマを例として扱うことで、ある問題について、自らの経験や知識のみですぐに是非かの答えを見つけようとするのではなく、複数の立場の論点や歴史に目を配って考察し、「なぜ簡単に答えが出ないのか」悩み考えることの重要性を伝えたかったからである。この意図については、うまく伝わったのかどうか、率直に申し上げて自信がない。

4. チャレンジ半ばの心残り

もともと授業計画を作ったときには、このように慎重に議論し考えるべきテーマについては、学生にリアクション・ペーパーで意見や感想を提出してもらい、その中からいくつかの意見を次の授業で紹介し、さらに教員がコメントをすることで、バーチャルな議論を講義内で行う計画にしていた。ドイツの議論の紹介は教員が行うが、それをうけての議論は、受講者と双方向で行おうと考えていたのである。しかし、講義開始2週間前に、受講者数が約470名だという連絡をうけて、この計画は暗礁にのりあげてしまった。500名でもリアクション・ペーパーに毎週目を通すことはできるというご意見もあるかもしれないが、学生の意見を、次週に授業で紹介するための準備作業なども含め、これを毎週行うことは、私にはとても難しいことに思えたのである。シラバスの成績評価欄を変更し、リアクション・ペーパーにかわるものとし

て、CHORUS上で感想や質問を提出してもらおうシステムを導入はした。ただ、授業外の時間や場所で、感想を送ってくれる学生の数は多くはなく、(それでも送ってくれた熱心な少数の学生たち以外の)学生のリアクションが分からないままに講義をすることになってしまった。先に述べた「自信のなさ」はここからくるもので、この点は、大きな心残りである。

今年度初めて開講された「〇〇語圏の社会」や「〇〇語圏の文化」は、どれも受講者が多かったと聞いている。ドイツ語に関しては、池袋キャンパス前期の「ドイツ語圏の文化」も、後期の「ドイツ語圏の社会」も、どちらも全く想定外の受講者数となった。現在のシステム上困難であることはわかったうえであえて提言させていただきたいのだが、本来ならば、全カリの講義科目についても、想定されるおおよその受講者数(100人単位でよい)が、シラバス執筆時点で分かっていることが望ましいだろう。TAという形の授業補助もありがたいが、それだけでは受講者数に適した講義を行うための完全な

対応はできない。100名相手の講義と、500名相手の講義では、プレゼンの方法や試験の方法だけでなく、講義の内容、また講義の目的そのものも変わってくるからである。

今回、初めての大人数講義に、未熟な私はすっかりとまどい、授業のすめかた、成績評価のしかたなど、講義終盤まで右往左往してしまった。結局、一番そのとぼっちりを受けたのは学生であったと思う。これはおそらく語学教員の性なのだろうが、受講者が大人数であることが分かったあとも、私は、成績評価から「出席」という項目を削除することができなかった。このことは、私語の多さに辟易した熱心な学生から批判をうけた。いわく、出席をとらなければ、熱心な学生だけが来るようになり、適正な授業環境が保てるのに、というのである。次回の大人数講義にむけて、私個人は教員として一つ知恵をつけたことになるが、今回、他の学生の授業マナーの悪さゆえに講義に集中できず、私以上に腹を立てていた学生たちには、本当に申しわけないことをしたな、と思う。

はまざき けいこ

(本学異文化コミュニケーション学部准教授)